

ひめした 姫下遺跡(本発掘調査A)

所在地 安城市姫小川町地内
(北緯34度54分45秒 東経137度05分47秒)

調査理由 中小河川改良事業(鹿乗川)

調査期間 令和2年6月

調査面積 12㎡

担当者 池本正明・永井邦仁



調査地点(1/2.5万「安城」)

調査の経過 調査は、愛知県建設局河川課から愛知県県民文化局を通じた委託事業として行なった。鹿乗川および同排水路左岸の、昨年度新たに事業用地となった1区画(620㎡)を対象として、2m×3mのテストトレンチ(TT)を計2か所に設定し、遺構と遺物を検出するとともに土層の状況を確認した。

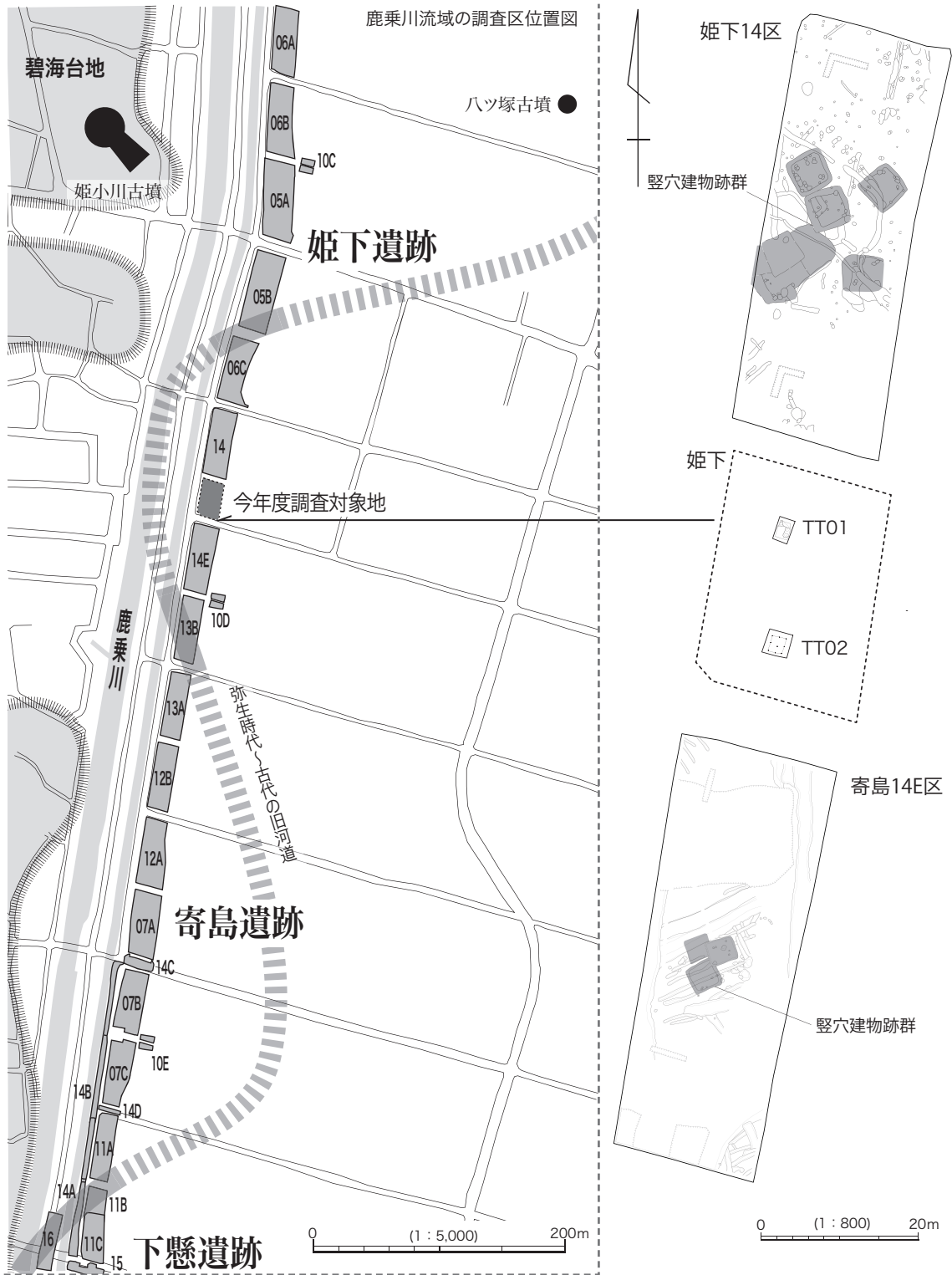
立地と環境 遺跡は安城市東部の沖積低地にあり、調査対象地の標高は7.8～8.0mである。姫下遺跡は、碧海台地東縁を南北に流れる鹿乗川の現河道左岸に展開する鹿乗川流域遺跡群に含まれる。調査対象地の区画は姫下遺跡の南端に相当し、南隣の区画は寄島遺跡の範囲とされている。これまでの発掘調査によって、寄島遺跡は弥生時代中期～古墳時代初頭、姫下遺跡は古墳時代前期をそれぞれ中心とする集落遺跡であることが判明している。なお鹿乗川右岸の台地上には、古墳時代前期の姫小川古墳が立地する。

調査の概要 TT01は、地表面下約0.5mで褐灰色の粘質シルト層(近世の耕作土)があり、さらにその下約0.5mで古墳時代の土師器から中世の山茶碗を多量に含む不整形な土坑01SXを検出した。ただし当該遺構は埋土がブロック状を呈するシルトが主体であることから、近世段階の埋め戻しを伴う何らかの造成痕である可能性がある。そして01SXの下位には、基盤層である粘質シルトの上面で土坑02SXを検出した。02SXからは古墳時代の土師器と若干の須恵器が出土することから、当該期の集落に関わる遺構と考えられる。

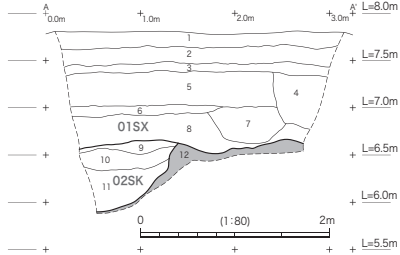
TT02は、地表面下約2.0mまで粘土や細粒砂の互層が続き、標高約6.3mで白色の粗粒砂層上面となる。遺物は古墳時代の土師器が若干みられるのみである。当該地点は、1930年代の『碧海郡桜井村土地宝典』によれば、東西方向の用水路があったと考えられる。また、その東側には「野池」「西野池」という字があり、時期をさかのぼると、ため池または湿地帯であった可能性がある。東西方向の用水路を挟んで北が「姫下」南が「寄島」に分かれており、凹地地形が字界の根拠になったと推測される。

まとめ 南北両区画(姫下14区・寄島14E区)では、調査区の広範囲にわたって攪乱や耕作痕跡(小溝)がみられ、集落遺構が大きく抉り取られている。その一方で、基盤層が残存している部分では、古墳時代初頭～前期の竪穴建物跡群が密集して分布していることが明らかになっている。したがって、今次発掘調査のTTでは明瞭な建物遺構の検出ができなかったものの、集落域内である可能性は高い。

また、今次発掘調査によって、亀塚遺跡から南に位置する鹿乗川沿いの事業用地における遺跡の範囲に関わる検証に一区切りがついた。結果、途切れるところが極めて少ない南北方向に連続する、弥生時代から古墳時代を中心とする集落遺跡群という実態を確認するに至った。この実態こそ、鹿乗川流域遺跡群の最大の特徴といえる。(永井邦仁)



TT01東壁断面図と土層解説



- 1 7.5Y3/1 オリーブ黒色シルト混じり粘土(現代の耕作土)
- 2 2.5Y3/1 黒褐色シルト混じり粘土 細粒砂含む(1の床土)
- 3 10YR7/2 にぶい黄褐色粘土 細粒砂含む(1の床土)
- 4 2.5Y5/6 黄褐色細粒砂
- 5 10YR4/1 褐灰色粘土 細粒砂含む 下位はやや明るい色調(近世以降の耕作土)
- 6 2.5Y6/2 灰黄色粘土に10YR3/2 黒褐色がブロック状に混じる
- 7 5Y7/2 灰白色粘土と5Y4/1 灰色粘土がブロック状に混じる 下層部に7.5Y7/1 灰白色細粒砂がラミナ状に入る
- 8 7.5YR4/1 褐灰色粘土と2.5Y6/1 黄灰色粘質シルトがブロック状に混じる(中世以降の不明遺構 01SX)
- 9 2.5Y6/1 黄灰色粘質シルト 7.5YR4/1 褐灰色シルトがラミナ状に入る(古墳時代以降の不明遺構 02SK 1層)
- 10 10YR5/1 褐灰色粘土と7.5YR4/1 褐灰色粘土がブロック状に混じる(古墳時代以降の不明遺構 02SK 2層)
- 11 5G2/1 緑黒色粘土と10GY5/1 緑灰色シルトが混じる(古墳時代以降の不明遺構 02SK 3層)
- 12 5Y5/2 灰オリーブ色粘質シルト(基盤層)

姫下遺跡の調査概要